

畿内における名主座について

菌部 寿樹

はじめに

本稿は、畿内の山城国ならびに和泉国における名主座について論じるものである。

名主座とは、一四世紀初頭ごろに成立した、村落内身分である名主頭役身分の者たちの身分集団である^①。名主頭役身分とは、名主職の所持をもとに、宮座である名主座の頭役を勤仕する者の村落内身分のことである。また村落内身分とは、村落集団によりのおの独自に認定・保証され、一義的にはその村落内で通用し、村落財政により支えられた身分体系である。

名主座は中国地方に分布するとされてきたが、近年、筆者の探索により、それを越える広い範囲に名主座が分布していたことを確認しつつある。本稿は、その探索の一環として、山城国久世郡、和泉国日根郡・南郡における名主座の事例を紹介したい。

一 山城国

山城国久世郡久我上荘、現在の京都府京都市伏見区にある菱妻神社（ひしつまじんじゃ）は、中世、久我上荘の惣荘鎮守社であった。久

我上荘の領主である、公家の久我家に、次の文書が伝わっている。

上久我大明神御神事御頭田寄地之事

（頭田一四筆中略）

右、被相定御神事御頭田之事、若此名主之内、不慮に相違之儀、又者為 上儀、或者退伝、或ハ私之繼戦雖有之、御本所様・名主中毎年相談、御頭可勤上者、於此下地、違乱煩対頭人若有之時者、其歳之頭人不及取沙汰、為 御本所様・惣名主中、御供名主座并酒好・渡物・諸下行以下、如先規目錄可執行、但御頭米於損免減者、可応其次、御能録錢之儀、毎年式百疋之分可出之、但為衆儀相談、造営又者御神事道具已下、可有用意者也一御馬頭屋へ從此内式石可相渡者也、御本所様諸下行被出条、如此也

（中略）

一此頭田、速従本名、本役・諸公事相勤之間、何も惣田地に本役・諸公事無之者也

右此旨未代不可有相違者也、為其起請文に加連判者也

右日本国大小神祇、殊当社并両三社・愛宕山権現・多賀大社此罰、於相背仁跡者永可蒙者也、仍起請文如件

天文拾四年八月吉日

（竹内）季治（花押）

（小寺）秀有（花押）

（小寺）有次（花押）

（小寺）吉有（花押）

（斎藤）幸辰（花押）^②

この一五四五(天文一四)年の史料によると、上久我大明神の祭祀は名主座の頭屋によって勤仕されていることがわかる。別の史料によると、久我上荘には、武元名・国行名・為重名・依貞名(寄貞名・重貞名・則元名・吉方名・重安名・末次名の九名があつた³⁾。署判者の竹内季治は預所かつ名主であり、その他の四名も名主である。以上の点から、中世、久我上荘の惣荘鎮守社・上久我大明神(現菱妻神社)には、九名による名主座があつたことがわかる³⁾。

一六〇一(慶長六)年、領地替えにより久我上荘は久我家領でなくなる³⁾。これに伴い、名も存在しなくなり、名主座は消滅した。

この久我上荘の事例は、管見の限り、山城国唯一の名主座である。久我上荘は、領主久我荘家の名字の地であり、膝下荘園であつた。

さらに預所の竹内季治が名主座中にはいり、「御本所様・名主中毎年相談」というように、領家久我家の強い影響下におかれていた。そのような領主の強い支配下で、中世前期の荘園支配以来の名が温存されたことにより、中世後期に名主座が成立し維持されてきたものと思われる。慶長六年に久我家の影響力がなくなるとともに名主座も消滅したという動向も、久我上荘名主座の成立・維持に荘園領主支配の影響が強く働いていたことがわけるものといえよう。

菱妻神社宮司・淵田家貴氏によると、現在では、石倉・乾条・河原条・内嶋(以上、石原町)、西条・北条・前条(以上、本町)、僧防条・東条・南条(以上、御旅町)などの一三〜一四ブロックから、それぞれ世話方が選出されて、菱妻神社の千種祭が運営されている。このうち、石倉以外の九集落は、旧久我村すなわち久我上荘の故地である。詳細は不明であるが、集落が九つなのは、久我上荘の九名と関連

があるのかもしれない。

現在の世話方は、全員が合同で祭祀を運営している(ただし、宮掃除は集落で順番に勤めている)。したがって宮座的な要素は顕著ではない。しかし、ある時期までは村組頭役宮座として機能していたのではないかと思われる。

各集落の協和会(青年団)の者が四〇歳になると同会を脱して、世話方を勤めるという。世話方はまた、「トウヤ」とも呼ばれる。すなわち、この各集落内では臈次階梯制的な論理で祭祀役が維持されているのである。

中世後期、久我上荘惣荘鎮守社である上久我大明神は名主座として運営されてきた。その一方で荘園内部には各集落が成立し、各集落内は臈次階梯制的な運営がなされていたのであろう。ただし、各集落に鎮守社がみられないので、各集落に臈次成功制宮座が形成したとまでは断言し得ない。しかし、各集落に臈次階梯制的秩序(年齢集団)があつて、一六〇一(慶長六)年の名主座消滅後、九村による村組頭役宮座によって千種祭が運営されるようになったものと推測しておきたい。

二 和泉国

(一) 日根郡

① 近木荘

和泉国日根郡の近木荘は、現在の貝塚市の西南部、神前・畠中・窪田などの地域にあたる³⁾。次の史料をみてみよう。

敬白 起請文之事

(中略)

奉始梵天帝尺四大天王、惣日本国中大小諸神、別当国五社大明神、殊丹生高野両大明神、当庄四ヶ鎮守明神御罰お、各可蒙罪身上者也、仍起請文之状如件

応永卅年癸卯八月廿七日

則貞(筆印)	真利(筆印)	友末(花押)	延真(花押)	吉松(筆印)
恒国(筆印)	有則(花押)	助成(筆印)	重久(花押)	安永(筆印)
末包(筆印)	友武(花押)	行貞(花押)	行永(花押)	真松(略押)
守行(花押)	国吉(花押)	安枝(花押)	全寿(花押)	貞国(花押)
是光(花押)	守貞(筆印)	守弘(筆印)	清恒(筆印)	貞近(略押)
真元(筆印)	依延(略押)	国元(略押)	則延(花押)	行恒(花押)
国貞(花押)	則松(花押)	得王(筆印)	吉道(花押)	貞包(筆印)
貞久(花押)	時行(花押)	利末(花押)	行元	恒是(筆印)
延利(花押)	依久(花押)	則包(花押)	末国(筆印)	為重(花押)
永寿(略押)	宗行(略押)	成弘(花押)	末方(筆印)	恒松(花押)
則国(花押)	真包(花押)	守行(略押)	定真(略押)	

この一四二三(応永三〇)年近木荘名主連署起請文には、五四の名がみえる。このうち行元名には書判がない。また守行名が二つあるが、書判は異なっている。

この五四の名は、単に近木荘における名の総数を意味するにとどまらない。次の史料をみてみよう。

神前要 泉州神前邑之産地、以在名為氏、字要、名宗行、今之畠中之古名神前邑也、先祖者、和泉国小木郷一之在行、日向權守清実云々、清実宅地者、代々神前氏居住之地也、諱者有謂而、小木郷五十四人賜綸旨、而悉有名、乃宗行五十四人之内也、專

小木郷称五十四名、綸旨者天正十三年根来乱之時、綸旨預之人為逃乱、日向国え持行云、故勅宣之時世不知、四十四人座定之時、要宗行者、左座上列之人也、于今准古格、(中略)

宗十郎 勅号故、代々宗行名乗、(中略)

左衛門太郎 宗行、実同郷石才村、五十四名之内吉直子也、宗十郎依無男子、為養子婿、家継、妻者、宗十郎娘也、于時天正十三年根来陣有之、(中略) 元和戊年(元和八年)八月十八日卒、法名光誓宗寿居士(下略)

これは、要家系図の一部である。まず冒頭の神前要の項をみてみよう。この項は、要家全体の由緒を語った記述である。これによると、要家はもと出身地の神前を名乗っており、通称の名字が要であった。代々、宗行を名乗ったという。「宗行五十四人之内也」とあるように、近木荘五十四名のなかに宗行名がある。

ここで注目したいのは、「四十四人座定之時、要宗行者、左座上列之人也」という記述である。四十四人は五十四人の誤記であろう。この五十四人座定で、宗行は左座上列であつたという。

また左衛門太郎の項にも注意したい。要左衛門太郎宗行は、もともと石才村の出身で、「五十四名之内吉直子」すなわち近木荘五十四名である吉直名の子であるという。ただし吉直という名はみえないので、これは吉道の誤記であろう。宗十郎に男子がいなかったので、宗十郎娘に入り婿して、要家を継承したという。

以上の記述から、次の点がわかる。

まず近木荘五十四名で宮座を構成していたこと。すなわち名主座である。そして左座とあるところから、近木荘名主座は左座・右座の二座

の体制にあったことがわかる。また養子を同じ名主家から選んでいるのは宮座に通例の身分保持のための施策であり、その点は近木荘名主座でも同様であったわけである。

また、要家には、

一 源太夫先祖法名近木庄五十四名久米田陣之書付二通

一名衆覚（堀川院寛治四庚午正月熊野へ御幸時分）二通

一 近木庄五十四名（于時神龜三丙寅年六月廿二日）一通

という文書がある⁹⁹。このうち、近木庄五十四名（于時神龜三丙寅年六月廿二日）というのが、要家系図の「小木郷五十四人賜繪旨、而悉有名」と関わるものであろう。もちろん七二六（神龜三）年という年紀からして繪旨そのものは信じられるものではないが、五十四名の伝承を明文化したものと注意しておきたい。

近木庄五十四名の実態については、遠藤氏の詳細な分析が既にある。それによると、五十四名は鎌倉以来の本名系統をひくものであり、各名は一町前後かそれ以上の規模を持っていたことが明らかにされている¹⁰⁰。

さてその近木庄五十四名の名主座は、どこを拠点としていたのであろうか。大越勝秋氏によると、豊田武氏が、延宝期における近義堂の宮座（五十四名座）を示す史料を要家文書のなかに発見したと述べている¹⁰¹。同じく遠藤巖氏も、豊田氏から直接、五十四名座についての教示を受けている¹⁰²。しかし、残念ながら、その後の大越氏の調査では、要家文書から当該の文書を発見できなかったという。

大越氏は次のように述べている¹⁰³。

旧北近義村・旧南近義村の村の宮座のうえに重層性をなして近

義堂の五十四名座が存在していたことになれば、近木庄の区域が近木宮郷となる。近義堂はどこにあったか現地できいてもわからない。五十四名座は近木庄域五十四人の名主が経営した宮座である。

ただし、近義堂の所在地は、佐川林氏¹⁰⁴によると、平安時代末期の屋瓦が出土する、貝塚市役所近くの、近義川北岸の河岸段丘上であるという。この辺りの小字に近木堂・近木堂上・コギト下などがあり、この付近には従来から寺跡であるとの伝承があるというから、佐川氏の推測は確実なものと思われる。

以上の点から、近木庄五十四名の名主座は近義堂を拠点とする惣荘的な寺座と規定しておきたい。

さて次の史料をみてみよう。

（マ、以下同じ）
記請文事

於近木庄新儀非例申者、天野大明神可蒙御罰者也、仍記請文状、如件

享祿四年 辛卯 二月十九日

近木庄

全寿

末国（花押）

行貞（略押）

吉道（花押）

是光（花押）

則松（花押）

恒国（花押）

貞包（略押）

則包（略押）

末方（略押）

友末（花押）

有則（花押）

行永（略押）

守貞（略押）

貞近（花押）

次郎衛門（略押）

太郎左衛門（略押）

若太夫（略押）

新左衛門（略押）

助右衛門（花押）

又三郎（略押）

次郎衛門（略押）

三郎衛門（略押）

助衛門（略押）

次郎衛門（略押）

左衛門次郎（略押）

孫衛門（略押）

若左近（略押）

孫五郎大夫（略押）

次郎衛門（略押）

次郎左衛門（略押）

辻衛門（略押）

四郎衛門（略押）

助太夫（略押）

次郎左衛門（略押）

塚本（略押）¹⁵

これは一五三一（享禄四）年の近木莊起請文である。ここには五四名のうち一五名が署判し、次郎衛門以下二〇人の署判がみられる。この署判について、先行研究は次のように評価している。

福尾猛市郎氏は、次郎衛門以下を新しく台頭した新名主だとみた¹⁶。

この福尾説を、五四名のうち一五名以外が没落して、新たに二〇名が台頭してきた説であると、杉本美範氏は理解した¹⁷。そこで「根来軍記」により、この一五名以外の末包・友成・国吉・貞久・永利・宗行がその後も健在であり、没落していないと杉本氏は福尾氏に反論している。さらに杉本氏は、一五八五（天正一三）年に則松（名）が三郎右衛門という官途名を名乗っている点を指摘している。また、この官途名を名乗る者たちが村落の宮座を背景にしていることなど、鋭い指摘もなされている。しかし、一五名以外の名が、なぜ享禄四年の近木莊起請文にみえないのかという点などに疑問を残しつつ、杉本氏は追究を終えてしまっている。

この論争でまず注意しなければならないのは、この起請文の意味である。

於近木庄新儀非例申者、天野大明神可蒙御罰者也

この起請文の本文からみて、新儀非例をしないことを署判者が誓っていることがわかる。従って、この署判者は過去に新儀非例をした者たちである可能性が高い。このことから、この署判者が荘内主要構成員の全員だと考えなくてもよいのではなからうか。新儀非法をした者だ

けが署判したという可能性を考えてみるべきであろう。

この点を踏まえて、福尾・杉本両氏の説を再検討しよう。前述のように、杉本氏は、この起請文に一五名以外の名が署判していないことを疑問としている。しかし、残りの本名のなかには、没落している者もあろうが、一方で杉本氏が指摘したように健在な者もいる。その健在な者はこの起請文の件では新儀非例をしなかったたので、署判しなくてもよかったと考えればいいのではなからうか。

一方、杉本氏は五四名のうち一五名以外が没落したと福尾説を理解しているが、福尾氏はこの署判そのものから本名の没落を論じてはいない。新名主が台頭している点を指摘しているだけなのである。すなわち、この起請文の三五の署判者が近木莊の全名主であるとみていいのである。

以上のように、享禄四年の近木莊起請文署判者は、名主・新名主のなかの新儀非例者のみと解釈すればよいと考える。

そのうえで、杉本氏の官途名を村落の宮座と関連させて理解する、鋭い指摘を継承発展させて考察したい。

まず前提として、名主座では乙名成、官途成などの騰次成功制的なシステムを基本的にもたない点を確認しておきたい。ここではいちいち例示しないが、従来の筆者の調査ではこの点はほぼ自明といえる。そしてこのことは、近木莊五四名名主座でも例外ではないと考える。したがって、享禄四年起請文、次郎衛門以下二〇人の署判にみられる官途名は、近木莊五四名名主座で付されたものではない。「村落の宮座」が彼らの官途の源泉にあるという杉本氏の指摘に同意する。ただし、村落の宮座ではやや不明瞭なので、ここでは個別村落の宮座と呼

んでおきたい。個別村落とは、のちの近世村落に継続していくような村落組織である。

そこで、個別村落宮座の内実をみてみよう。ここに、一七九九（寛政一一）～一八五〇（嘉永三）年御両社氏子座入帳という文書がある¹⁸。この文書は畠中共有文書の一つである。すなわちこれは、近木荘域の個別村落、畠中村の宮座に関する史料なのである。

長文の史料なので、必要な点のみ摘記して説明したい。この文書は、「当村両社氏人座入之儀」について規定したものである。主に座入りの条件について規定しているわけである。この文書の作成主体であり、かつこの宮座の主導者は「左右之長者」、「座老四人」といわれる者たちである。この左右とは左座・右座ということだと思われ、左座に二人、右座に二人の座老¹⁹長者がいるのである。これはすなわち臈次成功制宮座であり、乙名成や官途成をする畿内近国型の宮座である。そしてまた、この文書の中に「家伝り之座」という文言があるように、これは近世の家格制を前提とした宮座でもある¹⁹。

このような個別村落の宮座儀礼としての官途成を経て、次郎衛門以下二〇人の署判の官途呼称が成り立っていたのであろう。そうであるとすれば、彼らは、個人の経済力とともに、このような個別村落の台頭を背景として、新たな名主として「新儀非例」をおこなっていったのではなかろうか。

それでは、このような個別村落はいつ頃から成立し、力を持ちはじめたのであろうか。

近木荘は、立荘以前から上番・中番・神前番・馬郡番の四番に編成されていた²⁰。前に引用した史料に「当庄四ヶ鎮守明神」とあるのは

四つの番ごとに鎮守社が置かれていたからではないかという、佐川氏の指摘もある²¹。そして、神前番は近世の個別村落である神前村へつながるものもあった。しかし、これはあくまでも支配のための番編成であった。刀祢・番頭のみならず、地頭も各番ごとに存在していた。それは、荘園領主高野山もそのまま受容し用い続けた支配機構であった²²。この番編成が強固に存在していたため、近木荘域での個別村落の形成は遅い。

高野山文書中の近木荘関係史料には、個別村落に関する記述はみられない。近木荘域の個別村落は、沢・畠中・神前・加治（鍛冶）・脇浜・窪田・地藏堂・王子などである²³。廣田浩治氏によると、「近木荘域では、畠中・鳥羽・窪田・沢の地区で根来寺方の城が築かれ、その城の名称と同じ村落の名が近世に続くことから、やはり戦国期には個別村落が形成されていた」とのことである。同氏によると、このことは本願寺の「宇野主水日記」や「根来出城図」で裏付けられるという。今後の廣田氏の研究に期待したい。

近木荘における個別村落の形成が戦国期、いまのところ、一六世紀前半頃であろうという点は、後述する熊取荘の例からみても首肯できるものと思われる。そして戦国中期といえようか、一五三一（享祿四）年の起請文に官途名を持つ者たちがみられることは、個別村落の形成・台頭という状況と合致している。

しかし、このような個別村落を背景とする新興勢力の台頭が、即座に近木荘五四名主座の崩壊に結びついたわけではなさそうである。さきほど触れた畠中村の御両社氏子座入帳の左右之長者²⁴座老四人に次の名前が記されている。

左長者 神前要人

同 要治五右衛門

右長者 川口徳右衛門

同 坂上五左衛門

ここで出てくる、神前要人は神前村（前掲要家系図によれば、神前は畠中村の古名）の要家の者と思われるが名前の記載のありかたがやや不可解である（神前が苗字・要人が名前、要家とは関係ないかもしれない）。しかし、要治五右衛門は明確に要家の者であり、宗行名の名主ではなからうか。すなわち、個別村落の宮座には本名主も関わっていたのである。

近木庄五四名は、実際の近木庄の名ということもあつて、支配の枠組みとして強固なものであったと思われる。それがまた近義堂の寺座となることにより、荘園支配の終焉後も五四名は地域を主導する伝統的な格式を維持していたものと思われる。

一方、新興勢力は、新名や新たな名請百姓として、享祿四年の起請文や一五九四（文祿三）年の検地帳に出てくることは、既に福尾氏が指摘している通りである。新興勢力者のなかには、五四名中の没落者の名跡を引き継ぐことで、五四名名主座に加入した者もいたかもしれない。しかし、五四名という枠組みそのものは打ち破られなかったのではないかと思われる。

そして、中世から近世にかけて、個別村落が地域の主導権を握るようになってくると、五四名主座は次第に形骸化していったものと思われる。現在、近義堂の位置がかるうじて地名と伝承でうかがわれるのみで、寺座儀礼も消滅し関係文書もほとんどない。

確かに、大越氏の作成の推定図²⁴のように、近義堂五四名座の下に個別村落宮座が重層する形にはなる。しかし、そのように重層していた時期は中世末期から近世初期の案外に短い期間だけだったのかもしれない。

②熊取荘

日根郡熊取荘、現在の泉南郡熊取町久保に大森神社（大森明神）がある。大越氏によると、この大森神社の五十四名座共有文書のなかに一八三〇（天保元）年改の算用帳があるという²⁵。この算用帳によると、五十四名座は四ヶ番に分かれ、小垣内（おかいと）番一三人・朝代番一四人・小谷番一二人・久保番一五人からなり、各村番に一人ずつの番親がいて村の年寄がその任に当たったという。現在、この史料をみる事ができないので、この点を検証すべく、別の史料をみてみよう。

御幸記にも寛治四年に熊野御幸の事を記セリ（割注省略）、その時、熊取庄中、人柄家がらの者かたじけなく存而、五十四人御興を仕る、その家々今に五十四名家といふ、

（中略）

五十四名家の名帳、戦国の時の分ハ紛失してなし、今、慶長四年の帳を移して便覧のためにす、

小垣外村番

長者様 小佐治様 新十良 茂兵衛 彦五郎 庄左衛門 左近兵衛
同 源七 新六 甚太夫与七 与治良 甚太良 拾三人

朝代村番

中左近太夫様 中左太夫様 西左近殿 源治 右衛門太郎 左近
 太郎 助治良 又六 若左近 宮内五良 宮内太良 右近治良
 刑部 七兵衛 拾四人
 小谷村番

大屋 六兵衛 忠兵衛 宗三 惣治郎 亦右衛門 右衛門太郎
 助左衛門 助太夫 又治良 善四郎 藤三良 拾式人

久保村番

半十良 左平治 次良作 久三 宮内五郎 宮内三 かた木や
 左近太良 左近四 又三良 左近二 左右衛門 甚三 宗三 九
 右衛門 拾五人 合五拾四家也、

この内、長者様といふハ、をゝかち長者の事也、六百年以上の家
 にて、和泉州四長者の一也、この家断絶後、いつ頃よりの事にや、
 当家二この株を持ちたり譲り受し年数不知、小左治様と有之ハ、藤蔵株
 の分也藤蔵とハ即小左三の初名にして、大納言盛重のこと也、この人いつの頃たれの株を譲り受
 られしにや、五十四名帳にても難分、今この株、中左近預かり持り、このゆ
 へに今、左近・当家八下地に有之上に又外の分をひとつづゝ受持
 たれハ、今二人役を勤むる也、是に依て中古以来五十四人のもの
 共、一年に二十七人宛隔年に神幸に供奉すれとも、我ら二人ハ二
 株なれば決年なく、年々名代をもて供奉する事也、雑費集銭もミ
 な二株分を出せり、今この通り也、この内にも小百姓は盛衰はや
 きに依て断絶せハ、その親族外戚杯尋て譲りかゆるほとに段々名
 前かわり行ケリ、当時の名前左の通也²⁶

これは、中盛彬「先代考拠略」の一節である。「先代考拠略」は、
 一八三九（天保一〇）年に、中盛彬が降井家先祖の事跡をまとめた著

述である（三浦圭一氏の解説）。したがって二次史料なのであるが、
 ここにも「五十四名家」のことが記されている。

「先代考拠略」においても、大越氏の指摘のように五十四名座は小垣
 内番一人・朝代番一人・小谷番二人・久保番一人の四ヶ番で
 構成されている。

この五十四名は、一〇九〇（寛治四）年に熊野御幸の神輿を舁いだ熊
 取荘内の五四の家であるという。五十四名家の「名帳」があったが戦国
 時代に紛失したため、一五九九（慶長四）年の帳面を中盛彬が書き写
 したという。熊野御幸のことは伝説的なこととしてひとまず措くが、
 戦国期には五十四名の「名帳」があったという伝えは信頼してもよから
 う。

ただし、慶長四年の帳に記載された五十四名は、名主と思われる個人
 名だけで、名（みょう）の名称は記載されていない。

また五十四名というのは、前述した近木荘五十四名と同数である。これ
 は偶然の一致なのか、または五四という数字に何か特別な意味がある
 のか、いまのところ不明である。

この五十四名の筆頭に「長者様」がいる。この長者とは「をゝかち長
 者の事也、六百年以上の家にて、和泉州四長者の一也」という。「をゝ
 かち」は大垣内であろうか²⁷。和泉国の四長者のうちの一家だとい
 う。この長者の家が断絶した後を降井家が継承したという。そのため
 に、この熊取荘五十四名座のことが「先代考拠略」に記載されたわけな
 のである。

このあと、同書には、

寛政三龍舎辛亥年改正五十四名中々、この帳を用ゆ

とあり、一七九一（寛政三）年当時の五四名家が記載されている。そして、

この帳面四名の内四番とも一番より一人つゝ都合四人場をやといふ者ありて、この帳面をとり渡し、算用等迄いたす也、文化十三子とし八宮村嘉左衛門二アリ、かりて見たり

とある。この寛政三年でも、小垣内番一三人・朝代番一四人・小谷番一二人・久保番一五人という四ヶ番の構成そのものは変わらない。そして、この番それぞれから「場をや」（場親）がでて名主座の算用をするという。その際にこの名帳はその場親の一人に渡されていた。一八一六（文化一三）年、中盛彬が調査したとき、寛政三年名帳は宮村・嘉左衛門の手許にあつたという。ちなみに寛政三年名帳をみると、宮村の嘉左衛門は「小垣外番」（小垣内番）の一員であることが確認できる。

前述したように、近木荘も上番・中番・神前番・馬郡番の四番に編成されていた。このことが、個別村落が力を得ていくうえでの障害になったのではないかと指摘した。この点、熊取荘ではどうであろうか。

熊取荘の個別村落は大久保・五門・紺屋・野田・七山・小垣内（おがいと）・久保・小谷の八ヶ村である²⁸。同荘及び周辺の個別村落が中家の売券にいつ頃からみられだすのかを目安に調べると、一五世紀後半から一六世紀前半にかけて個別村落が形成していることがわかる²⁹。前述した近木荘の個別村落の形成が一六世紀前半頃であるのに比べると若干早い。それであっても、畿内において、この時期での個別村落形成は相当に遅いものといえよう。これもやはり、名主座、そし

て番の影響によるものでなからうか。

五四名座は一九四〇（昭和一五）年に解散したが、その格式は戦後も健在だった。旧八月二五日の大祭の神輿渡御には、熊取の豪族中氏、降井氏などの五四名が必ず供奉するという旧習があつたという³⁰。

熊取荘において、大森神社はどのような鎮守社であつたのだろうか。熊取荘は大きく二つの宮郷にわかれていた。大森神社は前記したように小垣内番・朝代番・小谷番・久保番四ヶ番を祭祀圏（宮郷）としていた。ただし大森神社前宮司・矢野續氏の話によると、五四名は熊取荘全域に分布しているという。その点からみると、大森神社は熊取荘の惣荘鎮守社であつたといえよう。

一方、同荘内には野田宮（野田明神）もあり、同宮は中座・朝代座・大久保座からなつていた³¹。野田宮の祭祀圏（宮郷）は、熊取荘内の大久保・朝代・五門・野田・紺屋村の範囲であつた。野田宮は熊取荘の準惣荘鎮守社といえよう。

野田宮には、一六一三（慶長一八）年の野田宮座宮役諸法度が残っている³²。野田宮の古い時期の内部構造は不明であるが、のちにも名の徴証はなく、名主座ではなかつたように思われる。

以上のように、熊取荘惣荘鎮守社である大森神社の宮座は、五四名の名主座であつた。しかし、同荘には臈次成功制宮座と思われる野田宮の宮座も併存していた。同一の荘園に二つの種類の村落内身分が併存しているのは、丹波国の山国荘と同様である。これは、和泉国が名主座分布領域と臈次成功制宮座分布領域との接点に位置していることに関連している事象といえよう。

なお、熊取荘の荘園領主は不明である。

③深日荘

同じく日根郡深日（ふけ）村、現在の泉南郡岬町深日に国玉神社がある。この神社に関して、『大阪府史蹟名勝天然記念物』第四冊は、次のように記している。

維新前まで山林を資に供し、明中（ミヤウチウ）十五軒にて之を保存したりといふ。現に石繋中、明中と刻したるもの数基あり。³³
また国玉神社が発行している「国玉神社略記」にも、
明治維新まで明中十五軒にて山林等を資にして祭祀。保存しておりましたものです。磴下坦地にあります。

とある。ただし残念ながら、二〇〇九年九月の現地調査で、筆者は明中十五軒の碑文を見出すことはできなかった。

この明中十五軒の記事を受けて、大越氏は、次のように分析する。

大阪府史蹟名勝天然記念物第四冊によると、国玉神社は明治維新前まで山林を資に供し、明中（みょうじゅう）一五軒でこれを保存したという。現に石繋中、明中と刻んだもの数基ある。ただ今明中七軒といつて、名主七軒の意であろう。現在辻喜代次、北村武久、新金（あらがね）睦夫、門前幸太郎、新金喜久男等七人で、山林、水田を共有している。古い名主のなごりと考えられる。³⁴
すなわち、明Ⅱ名で、一五名による名主座がかつて国玉神社に存在したのではないかという。筆者も大越氏の説に賛成である。

近世の国玉神社には、深日村・孝子村共同の宮座「本座」があったという³⁵。一八五二（嘉永五）年の段階では、深日村一〇四軒・孝子村一〇七軒に開かれた宮座となっていた。

大越氏の調査時点で、七明中が山林、水田を共有していったとい

う。したがって、宮座が深日村・孝子村の村人に開かれた段階でも、明中（の一部）は神社における特権をかううじて維持していたのであろう。

中世、この地域は賀茂別雷神社領の深日荘であった³⁶。そのために、加茂神社が勧請され、式内社にも比定される古くからの国玉神社は衰微したという。したがって深日荘の惣荘鎮守社は加茂神社と考えられる。深日荘における国玉神社の位置づけは明らかではないし、また明中一五軒と中世の名との関係もよくわからない。

ここでは、国玉神社には一五名による名主座がかつて存在し、それは深日荘となんらかの関係があつたものと推測するにとどめたい。

(二) 南郡

最後に、和泉国の南郡についてみてみよう。現在の貝塚市森に、木島荘（きのしましろう）の一宮とされた稻荷神社がある。近世、中盛彬の著書「かりそめのひとりごと」に、次のような史料が載せられている。

廿三日御神事之次第

一前之宮にて 神事定（中略）

宮うつしなどは、かみのちやう、下よりかく屋よりいたし

(中略)

一上下のちやうのや、まくをはる

(中略)

九人わたし下庄よりも如此

九人えぼし上下にてまとをかざへ（中略）

又御神事の莊重に神すまふ、上下の名衆の内より式人いたし手
やいにて初也

(中略)

天正七年九月吉日³⁷

これによると、二三日の神事で「上・下の名衆」から二人でて神事
相撲がなされたことがわかる。「かみのちやう」、「上下のちやうのや」
とあるのは、上庁（長）、上下の庁屋のことで、上・下の名衆それぞ
れに神事鋪設の庁屋があったのであろう。

また、「九人わたし下庄よりも如此」とあるところからみて、上庄
九人の名主、下庄九人の名主がそれぞれ神事に奉仕していたことがう
かがえる。その点で、同じく「かりそめのひとりごと」の次の記述が
参考になる。

条々

右上庄長衆中（中略）此旨於相背輩者、衆中として可処嚴科者也

天正七年己卯三月十六日

上之庄 名衆中

延利
末寅
延成
吉定
延時
行松
重利
吉延

延定

ここでは、「上之庄 名衆中」が博奕など（中略部分）を禁制して
いる。この上庄名衆中もちやうど九名みられる。したがって前述の上
庄九名・下庄九名という点と合致する。

実は従来、この間の記述が誤解されており、たとえば大越氏は、木
島上の庄の名主として延利、末宣、延成、吉定、延時、行松、重利、
吉延、延定の名が記され、名主が宮座の中心をなしている事例だとみ
ている³⁸。上の庄九名が宮座の中心になっていること自体に間違いは
ないのであるが、大越氏は下庄の九名を見逃している。

どうしてこのような誤解が生じたかというと、「かりそめのひとり
ごと」の「廿三日御神事之次第」ではじまる部分と、のちの「上之庄
名衆中」までの部分が一連のように記載されているせいなのであ
る。しかし、この記載は、

①廿三日御神事次第

「廿三日御神事之次第」から「天正七年九月吉日」までの部分（一
二七～一三一頁）

②正月十三日御的次第

「一正月十三日之御的」から「天正浅年正月十三日」までの部分
（一三二～一三四頁）

③条々

「条々」から「延定」までの部分（一三五頁）

の三つの部分に分かれているのである。

それを一連のものと誤解したため、「上之庄 名衆中」が祭祀全体
を取り仕切っているかのように考えられ、下庄の名衆について理解が

及ばなかったものといえよう。

さて、この②の部分に「稻荷大明神御的之次第」とあるように、この記載は稻荷神社の祭祀に関するものである。そして、大越氏が木島上の庄としてるように、この記載にてくる「庄」は木島荘であろう。以上の点からみて、一五八一（天正九）年以前に、木島荘上荘九名・下荘九名の名衆中により、稻荷神社で宮座が営まれていたことが明らかである。もちろん、これは名主座である。

この名衆中に関して、興味深い史料がある。

今度、森と取合之剋、以御一人之先懸、被追崩大勢之敵、剩被蒙疵之段、高名之至、古今無比類之仕合候、以来ケ様之儀於在之者、弥可被励軍功之条、肝要二候、恐惶謹言

六月廿七日 (黒印) 「名衆中(花押)」

阿部正久老³⁹

これは年未詳の名衆中感状である。「名衆中(花押)」と署判ともども黒印という惣印の文書である⁴⁰。この名衆中ははたしてどのものであるかについて、従来、いくつかの見解があった。しかし、藤木久志氏の研究により、これが戦国末期の木島荘の名衆中であることが確実となった⁴¹。この名衆中は、上荘・下荘あわせた木島荘惣荘の名衆中であろう。この文書は宮座と直接関わるものではないが、名衆中のもつ地域主導力が健在であることの証となろう。

さて、木島荘域の個別村落は、木島谷五ヶ村の清児(せちこ)・名越・森・三ツ松・水間である⁴²。このうちの三ツ松村に、次のような文書三点が伝わっている⁴³。

売渡申田地之事(中略)

在泉州南郡木島庄三松村之

右件田地者、三松村二雖為買徳、(中略)

永禄元年十月吉日

三松村之年寄中(略押)

若衆中(略押)

菩提谷

成真院へ

参

※

※

※

売渡申田地之事(中略)

在泉劔州南郡木島庄三松村二之

右件田地ハ、三松村之雖為買徳、(中略)

三松村之年寄中(略押)

永禄元年拾月吉日

若衆中(略押)

菩提谷

成真院へ

参

※

※

※

(前略) 右件打物米ハ、三松森村中之番頭年寄中雖為知行、(中略)

永禄貳年 ツチトノ

三松村名主百姓中(略押)

同森村名主百姓中(略押)

成真院

まいる

ここで注意したいのは、「三松村」(以下、三ツ松村と記す)の「年寄中・若衆中」や「三松森村中之番頭年寄中」という表記である。す

なわち、三ツ松村には「年寄中・若衆中」というような臈次階梯的な組織があることを、この表記は示しているのである。また「三松森村中之番頭年寄中」という表記からみて、木島荘森村にも同様に臈次階梯的な組織があるものと思われる。

三ツ松村には宮座があった⁴⁴。その宮座は、一老・二老の主導による上六人・下六人の臈次成功制宮座である。そしてこのような三ツ松村の臈次成功制宮座は、少なくともこの一五五八（永禄元）年には遡るものと考えられる。

木島荘の個別村落において、少なくとも一六世紀中頃には、臈次成功制宮座が成立していたのである。

その点で注意したいのは、「かりそめのひとりごと」③条々に、「上庄長衆中」と記されていた点である。この上庄長衆中は前後の関係からみて「上之庄 名衆中」であることは明らかである。すなわち、一五七九（天正七）年、一六世紀後半の木島荘名主は「長」とも呼ばれていたのである。この「長」が「おとな」のことであるのはいうまでもなからう。このことは何を意味するのであろうか。

前述のように、木島荘の個別村落では、一六世紀中頃には臈次成功制宮座が形成していた。そして、それは年寄中や若衆中、または番頭年寄中、三松村名主百姓中として、地域の主導権を握りつつあった。土地の売買のみならず、打物米の「知行」についても、個別村落どうしでやりとりするほどに成長してきているのである。

このような個別村落の力を惣荘の名衆中が無視することはできなくなってきたものと思われる。そこで、名の論理だけではなく、個別村落の臈次の論理も惣荘の秩序に取り込んでいく必要があったのである。

う。それで、名衆を長と位置づける社会秩序がうまれてきたものと思われる。

問題はその具体的な連関である。木島荘上庄九名・下庄九名の名主が長（おとな）だとすると、それは清児・名越・森・三ツ松・水間五ヶ村それぞれの年寄とどのように関連したのが問題となる。しかし、いまのところ、これ以上、詳細な内部事情を示す史料はみあたらない。

たとえば、丹波国山国荘においても名主が長・年寄と呼ばれている⁴⁵。それは、座外の勢力との対立や同勢力の取り込みを図るために生じた結果であった。それと同じような力学が、木島荘でも働いたのではなからうか。

すなわち、木島荘惣荘鎮守社稻荷神社、上下一八名の名主座が上位集団として生き残るために、個別村落の臈次成功制宮座の論理を取り込んだと考えられよう。

また、その一方で、和泉国が名主座と臈次成功制宮座の混在地域であることの影響も考慮すべきであろう。木島荘のように名衆中が地域の主導権を握っている一方で、近隣には個別村落レベルのみならず、惣荘レベルでも、臈次成功制宮座の村落内身分秩序の地域があつたに相違ない。そういう地域との諸々の交渉において、名主が長であることが好都合であった可能性もある。

いまのところ、木島荘名主座の名主が長とも呼ばれていたことの背景を、この二点から推定しておきたい。

なお、木島荘の荘園領主は教興寺（河内国）である⁴⁶。この教興寺が名主座の維持に如何に関わったかについては、不明である。

おわりに

畿内における名主座の成立は、山城国久我上荘や和泉国近木荘のように、荘園領主支配との強い関係性のなかで条件付けられてきたもののように思われる。

そしてそのありかたは、名主座の維持の面でも同様にうかがえる。

和泉国における個別村落の形成は、近木荘では戦国期、一六世紀前半ごろと推定される。また熊取荘及び周辺の個別村落は、一五世紀後半から一六世紀前半にかけて形成していた。木島荘の個別村落においては、少なくとも一六世紀中頃には、臈次成功制宮座が成立していた。このような和泉国名主座地域における個別村落の形成は、一三世紀中頃には個別村落の形成はじまる畿内近国のなかでは、きわめて遅い。

そしてまた、和泉国でも個別村落の成立・台頭が、名主座の形骸化や廃絶の原動力であった。したがって名主座の息の長さと個別村落の社会的な力の弱さは、和泉国でも相關するものと思われる。

山城国久我上荘でも、中世後期には個別村落そのものは成立していたものと想像する。しかし、荘園領主久我家や久我家と強い繋がりをもち土豪地侍の力により、名主座体制は中世末期まで維持されてきたのである。

以上のように、畿内における名主座の事例は、名主座の成立や維持における政治的条件の重要性を示唆するものといえよう。

注

(1) 名主座に関しては、藤井昭『宮座と名の研究』（雄山閣出版、

(2)

一九八七年)、蘭部寿樹『村落内身分と村落神話』(校倉書房、二〇〇五年、第二章)、同「名主職と名主頭役身分—安芸国久島郷を中心に—」(『米沢史学』二二号、二〇〇六年)、同「周防国賀保荘における名主座について」(『米沢史学』二三号、二〇〇七年)、同「村落内身分の地域類型と讃岐国詫間荘」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四三号、二〇〇八年)、同「名主座の変質とその意義—讃岐国井原荘の冠尾八幡宮宮座—」・「名主座の分布領域と讃岐国」(いずれも『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三五号、二〇〇八年)、同「中部・北陸地方の名主座について」・同「山口県における名主座について」(いずれも『米沢史学』二四号、二〇〇八年)、同「山陰地方の名主座について」(上・下)(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三六号、二〇〇九年)、同「徳島県・高知県の名主座と名集落について」(前掲『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三六号)、同「大分県の名主座について」(『史境』五八号、二〇〇九年)、同「肥前国における名主座と名集落について」(『日本史学集録』三二二号、二〇〇九年)、同「村落内身分の地域分布と開発」(坂田聡編『禁裏領山国荘』、高志書院、二〇〇九年)、及び同「備後国杭荘における名主座について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』掲載予定)を参照のこと。

天文一四年八月竹内季治他四名連署起請文(久我家文書五七五号、『久我家文書』第一巻、國學院大学、一九八二年)。読みは、『特別展観 中世の貴族』(國學院大学、一九九六年、一九九

二〇一頁)の写真と読み取り文で改めた。この文書については、岡野友彦氏のご教示を得た。なお、先行研究として、岡野友彦『山城国久我荘の千種祭について』(同『中世久我家と久我家領荘園』、続群書類従完成会、二〇〇二年〈初出一九八九年〉)などがある。

- (3) 永正一一年久我荘名田・散田等帳并文書案(冊子、久我家文書四三八号)・永正一五年七月久我荘検注帳案(冊子、同家文書一四三三号。いずれも前掲注(1)『久我家文書』第一巻所収)。
- (4) 『日本歴史地名大系』京都市の地名(平凡社、一九七九年、菱妻神社の項)・『京都・山城寺院神社大事典』(平凡社、一九九七年、菱妻神社の項)。これらの文献によると、名主座の上位に預所座があつたとされている。しかし、前掲注(2)の文書の記載からすると、預所座の存在は疑問である。
- (5) 前掲注(4)『日本歴史地名大系』京都市の地名(久我荘の項)。近木荘の先行研究は数多い。そのうち、在地村落構造の点で重要なものだけをあげておく。
- (6) ①福尾猛市郎「和泉国近木荘―惣的結合への方向を中心として―」(魚澄先生古稀記念会編『魚澄先生古稀記念国史学論叢』、魚澄先生古稀記念会、一九五九年)
- ②熱田公「室町時代の高野山領荘園について」(同『中世寺領荘園と動乱期の社会』、思文閣出版、二〇〇四年〈初出一九五九年〉)
- ③遠藤巖「和泉国近木庄における在地構造」(『文化』二八巻三号、一九六四年)
- ④同「和泉国近木庄の馬上帳と条里制の性格」(豊田武編『高野山領荘園の支配と構造』、巖南堂書店、一九七七年)
- ⑤佐川林「日根郡近木庄の惣社と近義堂及び五十四名座について」(『摂河泉文化資料』一八号、一九七九年)
- ⑥杉本美範「中世後期の貝塚地域―村落領主と地域結合(研究の視角)」(大阪府高等学校社会科研究会『社会科研究』三三三号、一九九〇年)
- ⑦網野善彦「供御人・神人の世界と近木荘」(『ヒストリア』一四四号、一九九四年)
- ⑧近藤孝敏「近木荘の歴史と在地の動向―その成立と展開を中心として―」(『ヒストリア』一四四号、一九九四年)
- ⑨小倉英樹「近木荘代官排斥運動の関係史料」(『ヒストリア』一八七号、二〇〇三年)
- (7) 応永三〇年八月近木荘名主連署起請文(高野山文書又続宝簡集三九一六三二号、『大日本古文書 高野山文書』五、東京大学出版会、一九七九年覆刻)。
- (8) 要系図(『貝塚市史』三巻 史料、貝塚市、一九五八年、四三頁)。この系図は、水損により、現在、披見できない。
- (9) 藤本篤編『要家文書目録』(貝塚市教育委員会、一九六三年)。
- 貝塚市教育委員会架蔵要家文書まD3-3-2・3・7。
- (10) 前掲注(6)③遠藤論文。
- (11) 大越勝秋『宮座』(大明堂、一九七四年、二六五頁)。
- (12) 前掲注(6)③遠藤論文(三一頁・注16)。ただし遠藤論文には、近義堂についての言及はない。
- (13) 前掲注(11)大越著書(二一七頁)。

- (14) 前掲注(6) ⑤佐川論文。
- (15) 享祿四年近木莊起請文(丹生文書、前掲注(4)『貝塚市史』三卷、三七〜三八頁)。
- (16) 前掲注(6) ①福尾論文。
- (17) 前掲注(6) ⑥杉本論文。
- (18) 寛政一一嘉永三年御両社氏子座入帳(畠中共有文書一二号、前掲注(8)『貝塚市史』三卷、六三四〜六三六頁)。
- (19) 畠中の宮座については、松本芳郎『泉州の宮座』2(泉南歴史民俗資料七一号、泉南歴史民俗資料社、一九九六年)を参照のこと。この文献は、廣田浩治氏のご高配により入手することができた。
- (20) 前掲注(6) ③遠藤論文、『熊取町史』本文編(熊取町、二〇〇〇年、四七九頁)など。
- (21) 前掲注(6) ⑤佐川論文。
- (22) 前掲注(6) ④遠藤論文。
- (23) 『角川日本地名大辞典』大阪府(角川書店、一九八三年、貝塚市の項、一四六六頁)。
- (24) 前掲注(11) 大越著書(表14 近木庄の重層的宮座構成(推定)、二一八頁)。
- (25) 前掲注(11) 大越著書(二二八〜二二九頁)。
- (26) 中盛彬「先代考拠略」(「家記・先代考拠略」、『熊取町史紀要』一号、熊取町教育委員会、一九八五年、二四〜二六頁)。
- (27) 前掲注(20)『熊取町史』本文編(四七二頁)。
- (28) 前掲注(23)『角川日本地名大辞典』大阪府(熊取の項、四三六〜四三七頁)。
- (29) 一四七八年高田村、一四八四年野田村、一四八五年大窪村、一四八七年朝廟村(朝社村)、一四九二年御門村、一五二〇年大畠村・おおかいと村(大垣村)・向出村、一五二八年窪村、一五三〇年向村、一五三一年紺屋村、一五三三年成合村、一五三六年箕和田村(中家文書二八・三三〜三五・三九・四三・一五一・一五四・一五七・一八二・二〇一・二二〇・二六八・三一二号、『熊取町史』史料編I、熊取町、一九九〇年)。
- (30) 前掲注(11) 大越著書(二〇〇頁)。
- (31) 前掲注(20)『熊取町史』本文編(四七〇〜四八五頁)。
- (32) 慶長一八年二月野田宮座宮役諸法度(久米田寺文書四三二号、『岸和田市史』第六卷 史料編I、岸和田市、一九七六年、六二三〜六二四頁)。
- (33) 『大阪府史蹟名勝天然記念物』第四冊(清文堂、一九三一年、一九七四年再刊、四七〜四八頁)。
- (34) 前掲注(11) 大越著書(二〇二頁)。
- (35) 嘉永五年本座人数座頭預帳(辻家文書、『岬町の歴史』、岬町、一九九五年、四五二頁)。
- (36) 前掲注(23)『角川日本地名大辞典』大阪府(深日の項)、『日本歴史地名大系』大阪府の地名II(平凡社、一九八六年、深日荘・国玉神社の項)。
- (37) 中盛彬「かりそめのひとりごと」(『拾遺泉州志』和泉史料叢書、和泉文化研究会、一九六七年、一二七〜一三六頁)。
- (38) 前掲注(11) 大越著書(一九九頁)。

(39) 年未詳六月名衆中感状(三ツ松・西村楠雄氏所蔵阿部文書、前

掲注(4)『貝塚市史』三巻、口絵第一図。貝塚市郷土資料館
マイクロフィルム西村祐一家所蔵文書。

(40) このような惣判・惣印の文書については、菌部「中世村落にお
ける惣判・惣印について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』七
七集、一九九九年)・同「中世村落における惣判・惣印の形成
とその意義」(『史境』四二号、二〇〇一年)を参照のこと。た
だし、恥ずかしいことに、いずれの論文もこの名衆中感状を見
逃しており、論じていない。

(41) 藤木久志「名衆中感状とその背景」(『開発・環境の変化による
山村・里村間の情報・交流と摩擦の研究』、蔵持重裕研究代表・
科学研究費研究成果報告書、立教大学、二〇〇三年、所収)。
この藤木論文については、廣田浩治氏のご教示による。

(42) 前掲注(23)『角川日本地名大辞典』大阪府(木島の項、四〇
二頁)。

(43) 永禄元年一〇月三松村年寄・若衆田地売券(一通)・同二年三
松・森村名主百姓中打物米売券(中家文書七三七・七三八・七
四二号、前掲注(29)『熊取町史』史料編Ⅰ、三五三・三五五
頁)。これらの文書も前掲注(39)文書と同様、惣判・惣印文書
である。

(44) 松本芳郎・前田浩一「貝塚市三ツ松の宮座」・「資料三 三ツ松
大村座文書」(前掲注(19)『泉州の宮座』2、所収)。

(45) 前掲注(1) 菌部「村落内身分の地域分布と開発」。

(46) 前掲注(36)『日本歴史地名大系』大阪府の地名Ⅱ(木島郷・

木島庄の項)。

【付記】

和泉国の事例に関して、全般的に歴史館いずみさの・廣田浩治氏
のご教示をたまわった。大阪府の調査では、廣田氏ならびに貝塚市教育
委員会・曾我友良氏、熊取町教育委員会・立石則也氏、大森神社・矢
野續氏、岬町教育委員会、国玉神社・山口隆雄氏のご高配をたまわっ
た。また京都府京都市の菱妻神社調査では、菱妻神社・洲田家貴氏、
皇學館大学・岡野友彦氏、京都大学・森本一彦氏のご教示・ご高配を
たまわった。記して感謝申し上げる。

本稿は、二〇〇七・二〇〇九年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究(C)「中近世における名主座の分布領域とその外縁地域の
宮座に関する村落類型論的研究」(研究代表・菌部寿樹)の成果の一
部である。

【英文標題】 Myoshu-za(名主座) in KINAI

【要約】 本稿は、山城国久世郡、和泉国日根郡・南郡における名主
座の事例を紹介したものである。

【キーワード】 宮座 村落内身分 名主座 名主頭役身分
臈次成功制宮座 臈次成功身分